

て、猪垣が大切に扱われていたことが判ります。

ところで、琉球王国時代に恩納間切の検者として、長嶺筑登之親雲上紀喜が、1825(道光5)年12月1日に任命され、1828(道光8)年12月1日に再任されたことが家譜資料にあります。検者とは、間切・島が経済的に厳しい状況になったため、一時的に首里王府から派遣されて間切・島に駐在して、経済的状况を改善するための職務を遂行する者でした。長嶺筑登之親雲上紀喜は、農作物を増産するためにインフラを整備したため再任されました。その記事に、大雨が降った際に、恩納間切恩納村(現在の恩納村字恩納)の田畑に土が流入して、稲穂が実らなかつたために溝を作り直したことや、猪垣については真竹で組み立てたことなどが記されています(那覇市歴史博物館所蔵『松姓家譜』1455)。この記事から、猪垣は竹で造られることもあったことが判ります。

以上の文書資料や考古資料を精査すると、猪垣は、竹やイスノキで造られることもあれば、石や石灰岩、テールサンゴで造られることもあり、猪垣の素材は、時代や地域によって異なっていたことがうかがわれます。また、谷茶の文化財調査で確認できたものは、一例を挙げたにすぎませんが、考古資料が非文字資料であるため、遺構とともに出土する遺物や、科学的な分析や当事者からの聞き取り調査などがなければ、いつ、どこで、なぜ造られたのかというところは不明です。そのため、考古資料の特質を理解するために、文献資料や証言資料などを用いることもありますが、それでもなお、史資料が作成された経緯が不明なこともあります。この場合には、他地域に存在する史資料と比較検証しながら推定することもあります。歴史資料には多様な解釈が存在するため、史資料や歴史認識をめぐる論争に発展することもあります。ここに歴史の醍醐味があります。

さて、過去・歴史を学ぶためには、史資料が不可欠です。私たちは、昨日何をしたのかというのを思い起こす際には、私たちの記憶をたどります。また、3ヶ月前に何を食べたかということは忘れてしまいますが、日記や写真、レシートなどから、何を食べたのか、判ることもあります。こうした過去に作成された事実の痕跡がない場合には、私たちは過去を知ることができません。歴史的な出来事や事象を知るためには、まずもって史資料を分析・検証・解釈することが重要です。そして、史資料に基づいた歴史的出来事を明らかにしたうえで、複数の出来事を関連づけることも大切です。このような地道な作業を繰り返しながら、恩納村における歴史的事実を明らかにして積み重ねることが恩納村史「歴史編」専門部会と事務局の仕



【写真4】金武町伊芸の猪垣  
(2021年3月4日撮影)

事です。そして、地域の方々から史料を提供してもらおう、すなわち地域の方々との協働することが、恩納村の歴史を知るうえで、非常に重要なことです。末筆ながら、恩納村史編さんだよりが100号を迎え、記念すべき号で書かせていただくことに感謝するとともに、末永く続くことを祈念しております。それも一重に、事務局の活動と、それを見守る村民の方々の賜物です。今後、村民のみならず、ご指導をいただきながら、恩納村の歴史・文化を掘り起こして発信したいと考える今日この頃です。

#### 【参考文献】

- ・「沖縄県埋蔵文化財センター報告書11  
沖縄科学技術大学院大学仮称建設予定地内の遺跡(Ⅰ)」  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2005年
- ・「沖縄県埋蔵文化財センター報告書36  
沖縄科学技術大学院大学仮称建設予定地内の遺跡(Ⅱ)」  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2006年
- ・「恩納村文化財調査報告書7  
沖縄科学技術大学院大学(仮称)建設予定地内の遺跡」  
恩納村教育委員会 2008年
- ・「掘り出された戦前の沖縄」  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2019年
- ・恩納間切各村内法  
(『沖縄県史14雑纂1』山城善三資料復刻刷1989年)